

# 積丹地域プロジェクト(大型定置網)

(第十八丸榮丸 19トン(改革型本船)、第三丸榮丸 14トン(作業船)、第七丸榮丸 14.7トン)

## もうかる漁業創設支援事業検証結果報告書 (改革漁船型・既存船活用型)

事業実施者: 東しゃこたん漁業協同組合

実施期間: 令和元年9月1日～令和6年8月31日(5年間)

### 1. 事業の概要

改革型本船を用船し、伸度の少ない高張力ロープ製側張の導入により荒天時の破断を防止した。また、底建網の新設により、低層を回遊するブリ類等の漁獲向上を図り、短期集中する主要魚種の来遊と荒天による破網防止に対応することで漁獲機会を逃さない体制を構築した。

さらに、側ロープの浮沈式化により、漁具の設置、撤去作業および海上作業の時間短縮による労働負荷の軽減を図った。これらを含め、改革型漁船の導入により、漁労作業の効率化、労働負荷の軽減、労働環境の改善、省人化を図る実証事業を行った。

### 2. 実証項目

#### 【生産に関する事項】

##### A 完全環締め揚網方式の導入

##### ① 省人・省力・省エネ型の改革型本船の導入

- ツインキャプスタン6台、シングルキャプスタン2台、クレーン3台の漁労機器を備えた19トンの改革型本船を導入し、乗組員9名で箱網及び表層金庫並びに底建網の左右両方を効率よく網起こしできる体制とする。

##### ② 底建網の導入

- 網成りの維持とブリの効率的な漁獲のために、箱網の反対側の運動場に底建網を新設する。

### 3. 実証結果

最新の漁労機器を備えた省力・省エネ型の改革型漁船(19トン型)を導入し、箱網及び表層金庫並びに底建網の左右両方向から効率よく網起こしできる体制を整えた。

水揚げ量の増加に伴い、日本人乗組員9名に加え、5年目はインドネシアの実習生を4名受け入れたことにより人件費は増加したが、労働負荷が軽減され、作業効率は改善した。

箱網の反対側の運動場に底建網を新設した。これにより、ブリが大量に入網し、5年間で平均728トン、320百万円の水揚げが得られた。

また、平均単価も440円/kgと計画を150円以上上回った。

5年間の水揚実績

(単位: トン、千円、円/kg、日)

| 項目   | 計画      | 1年目     | 2年目     | 3年目     | 4年目     | 5年目     | 平均      | 計画対比 |
|------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|------|
| 漁獲量  | 433.7   | 836.1   | 731.5   | 691.3   | 493.4   | 885.4   | 727.5   | 1.68 |
| 漁獲金額 | 121,823 | 374,594 | 177,296 | 324,666 | 211,616 | 512,351 | 320,105 | 2.63 |
| 平均単価 | 281     | 448     | 242     | 470     | 429     | 579     | 440     | 1.57 |
| 操業日数 | 87      | 117     | 133     | 96      | 85      | 98      | 106     | 1.22 |

##### ③ 高比重網の導入

- 垣網の網地を高比重漁網に変更し、目合を300mmから360mmに拡大して、垣網の変形と裾上りを防止する。

垣網の網地を高比重漁網に変更し、目合を拡大したことで、早潮による垣網の変形や裾上がりの度合いが小さくなった。

## 2. 実証項目

### ④ 細目網の導入

- 表層金庫の目合を20mmに細目化することで、近年増加傾向にあるマイワシやサバの目刺しを防止するとともに、高比重漁網を使用することで、目合の縮小により抵抗が増す網地の潮流による漁具の変形を防止する。

## 3. 実証結果

マイワシやサバの操業に備えるため、目合を細目化した表層金庫を使用したことで、目刺しはほとんど起こらなくなった。ただし、5年間通してサバ・イワシ類の回遊が少なく、特にイワシの入網は皆無であった。

サバ・イワシの年間水揚げ実績

(単位：トン、千円、円/kg)

| 魚種  | 項目  | 計 画   | 1 年 目 | 2 年 目 | 3 年 目 | 4 年 目 | 5 年 目 | 平均    | 計画対比 |
|-----|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| サバ  | 水揚量 | 14.1  | 17.6  | 90.2  | 11.8  | 49.2  | 53.7  | 44.5  | 3.16 |
|     | 金 額 | 1,421 | 1,020 | 2,908 | 392   | 3,305 | 3,153 | 2,156 | 1.52 |
|     | 単 価 | 100.8 | 58.0  | 32.2  | 33.2  | 67.2  | 58.7  | 48.4  | 0.48 |
| イワシ | 水揚量 | 18.5  | 0.0   | 0.0   | 0.0   | 0.0   | 0.0   | 0.0   | 0.00 |
|     | 金 額 | 931   | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0.00 |
|     | 単 価 | 50.3  | —     | —     | —     | —     | —     | —     | —    |

## B 省人化・省力化

### ① 船尾クレーンの増設

- 船尾クレーンの増設により、船尾での引揚作業を敏速化して人力による作業や危険な高負荷作業を回避する。

船尾クレーンの増設により、人力作業や危険な高負荷作業が回避でき、安全で効率的な操業が可能となった。

### ② 改良型魚捕部の導入

- 改良型魚捕部の導入により、キャブスタンを使用したロープ巻き方式により魚捕部を揚網することで、大量入網時の作業の敏速化・省力化と作業員の削減を図る。

魚捕部の揚網方式をキャッチホーラーからキャブスタンを使用したロープ巻き方式に変更したことにより、網を人力で捌く必要がなくなったため、労働負荷が軽減された。

### ③ 側張の浮沈式化

- 設置作業時は海底に沈下させてある側張を引き上げ、浮子の取り付けを行う。その後、漁網を固定する。撤去作業時は漁網を揚げた後、浮子の切り離しにより側張を沈下させる。大量のロープ等を漁船に積載して陸揚げする作業が省略される。

側張を浮沈式に変更した。  
ただし、次表のとおり、敷設作業及び撤去作業日数が計画を上回った。これは、荒天等による作業環境悪化により、慎重に作業を進めたためである。

敷設・撤去作業日数

(単位：日)

|     | 計 画 | 1 年 目 | 2 年 目 | 3 年 目 | 4 年 目 | 5 年 目 | 平均 | 計画対比 |
|-----|-----|-------|-------|-------|-------|-------|----|------|
| 敷 設 | 15  | 15    | 21    | 30    | 25    | 31    | 24 | 1.63 |
| 撤 去 | 5   | 8     | 9     | 9     | 12    | 10    | 10 | 1.92 |

## 2. 実証項目

### C 省エネ・省コスト

#### ① 省エネ型エンジンの導入

- 省エネ型のエンジンを導入することで、移動時間の短縮を図り、燃料消費を抑制する。

## 3. 実証結果

移動時間は、省エネ型エンジンの導入により、12～14ノットで航行したため、港から漁場まで10分、漁場から魚市場まで20～25分、魚市場から港までは15分へ短縮した。全行程では45～50分の短縮となった。  
しかしながら、ブリの大量入網があり、鮮度保持により高単価で市場の入札時間に間に合わせるべく高速航行したことから、燃油消費量は増加した。  
なお、燃油使用実績は、次表のとおり。

燃油消費量・金額実績

(単位：L、千円、円/L)

| 項目    | 計画     | 1年目    | 2年目    | 3年目    | 4年目    | 5年目    | 平均     | 計画対比 |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|------|
| 燃油使用量 | 31,200 | 48,450 | 51,260 | 38,000 | 46,930 | 50,230 | 46,974 | 1.51 |
| 燃油費   | 3,042  | 3,148  | 3,796  | 3,444  | 4,339  | 4,830  | 3,911  | 1.29 |
| 平均単価  | 97.5   | 65.0   | 74.1   | 90.6   | 92.5   | 96.2   | 83.3   | 0.85 |

#### ② ユビキタス魚探の導入A

- ユビキタス魚探を導入することで、陸上から魚群の入網量と流向流速の情報を確認し、操業の可否を判断する。また底建網操業が可能であっても陸上から潮の緩みを確認し、一度の出漁で両方を操業可能にすることで燃油を節約する。



ユビキタス魚探の導入により、陸上において魚群の入網量と箱網の網成りの状況を確認して、操業の可否を判断した。

#### ③ ユビキタス魚探の導入B

- ユビキタス魚探を導入することで、出港前に入網状況を予測することで、適切な氷の量を船に積み込むことができるようになる。

ユビキタス魚探を導入したことにより、出港前に入網状況を予測できるため、鮮度保持に必要な氷の量を船に積み込んだ。

#### ④ 魚艙の保冷機能の向上

- 改革型漁船の魚艙を断熱構造とすることで氷の消費量削減と漁獲物の鮮度保持を図る。

改革型漁船の魚艙を断熱構造としたことにより、氷艙の保冷性が向上した。  
5年間を通してブリが豊漁であったため、鮮度保持を図る必要があり氷使用量が増加した。

氷使用量・金額実績

(単位：トン、千円、千円/トン)

| 項目   | 計画    | 1年目   | 2年目   | 3年目   | 4年目   | 5年目   | 平均    | 計画対比 |
|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| 氷使用量 | 176.7 | 300.3 | 257.7 | 276.0 | 248.4 | 357.3 | 287.9 | 1.63 |
| 氷代   | 2,209 | 3,465 | 2,997 | 3,209 | 2,981 | 4,336 | 3,398 | 1.54 |
| 単価   | 12.5  | 11.5  | 11.6  | 11.6  | 12.0  | 12.1  | 11.8  | 0.94 |

## 2. 実証項目

### ⑤ 漁船作業灯のLED化

- ・ 漁船作業灯をLED化し、早朝の船上作業の安全を確保すると共に、電力使用量を削減することで、発電用補機関の小型化を実現する。

## D 労働環境の改善

### ① フラットデッキの導入

- ・ デッキを平らにして、船上の作業スペースを拡張することにより、事故の温床となる障害物を無くし、作業の安全性を向上させる。

### ② 寒冷地仕様の船室

- ・ 操舵室と船室に煙突の配管を通すことで暖房効果を得て、船員の防寒対策を図る。

### ③ キャプスタンの増設

- ・ 両舷前後方にツインキャプスタンを配置するほかシングルキャプスタンを中央に配置することで状況に応じてどちらの船側でも漁労機器による作業ができるようにする。

## E 乗組員の確保

### ① 漁業就業支援フェアへの出展

- ・ 毎年札幌にて開催されている北海道漁業就業支援フェアに出展する。

### ② インターンシップ/体験学習の受入

- ・ 定置漁業の就労希望者や地域の水産高校に対して、インターンシップの受け入れや講習を行う。また、将来の後継者育成につながることを期待する活動として、地域の教育機関に対して定置網の体験学習の受入を行う。

### ③ 研修制度の充実と休漁時の雇用

- ・ 休漁期間に漁網メーカー社員による漁具の講習を行い、乗組員の研修制度を充実させる。また、同期間に漁網仕立作業を実施することで、周年雇用を目指す。

## 3. 実証結果

改革型本船の作業灯をLED化したことにより、燃油使用量の削減ができた。

フラットデッキの導入により、作業スペースが拡大され、かつ、平坦となったことで、乗組員の安全性が確保された。

操舵室と船室に煙突の配管を通したことで、暖房効果が得られ、乗組員の冬季の航行時の操舵室と船室内における労働環境が快適になった。

両舷前後方にツインキャプスタン、両舷中央にシングルキャプスタンをそれぞれ配置した。  
これにより、左右両舷の作業負荷が平均化したことから、乗組員の作業効率と安全性が向上した。

乗組員の確保ができたため、北海道漁業就業支援フェアへの出展は見送ることにした。

なお、5年目に水産高校の新卒を1名採用し、乗組員の若返りを図った。

小樽水産高校と協議をしたが、授業の乗船実習とインターンシップの実施予定時期が重なり実施には至らなかった。

実証期間中はコロナ禍の影響により、休漁期間中に漁網メーカーの社員を美国港に招いての漁具講習は実施に至らなかった。しかし、3年目以降は、休漁期間である2月に札幌市内のホテルで日東製網株式会社が主催の勉強会に参加し、網仕立てをはじめとする技術講習を受けた。

また、乗組員の雇用については、1年目及び2年目は周年雇用できたが、3年目以降は漁網仕立作業の需要がなかったため、80日間の雇い止めを行い、周年雇用が果たせなかった。

## 2. 実証項目

### F 船上活〆機の導入

船上活〆機の導入により、品質向上と差別化を図る。  
（「積丹美国ブリ」（仮称）のブランドづくり）  
[取扱いマニュアルを整備]

### 【資源管理に関する事項】

#### G 漁獲対象魚種の適切な資源管理

##### ① サケ・ヒラメ等の種苗放流の推進

- サケ・ヒラメ等の定置漁業で重要な漁獲対象魚種の維持及び増大を目標として、種苗放流を推進する。

##### ② クロマグロの事前入網把握

- ユビキタス魚探を活用し、クロマグロの陸上からの入網確認により速やかな逃避作業と操業手順の変更を行う。分離落網と同時使用により、クロマグロの放流を的確に行う。  
[「北海道の海洋生物資源の保存及び管理に関する計画」を遵守]  
[放流手順マニュアルの整備]

##### ③ 分離落網によるクロマグロの混獲回避

- 箱網奥の表層金庫を分離落網として使用する。金庫に小型の漏斗を取付けて入口を狭窄する。閉鎖環境を好むブリは金庫に移動し、閉鎖環境を避けて表層を遊泳するマグロは箱網に残留する。その後、漁船は網を離して金庫へ移動し、マグロは漁船の下を通過して箱網内に放流される。

## 3. 実証結果

船上活〆機を導入することに併せ「積丹美国ブリ《鰯宝(しほう)》」の取扱いマニュアルを整備して、活〆ブリのブランド化に取り組んだ。

4年目から「取扱いマニュアル」をブラッシュアップし、船上活〆されたブリのうち、10kg以上の大型個体に限り、フィッシュアナライザーを用いて脂肪率15%以上で色合い等の外見が綺麗なものを、目の色が濃いものを厳選し「鰯宝」のブランド価値を強化した。

このような地道な取り組みに対し、徐々に地元TVやYouTubeで取り上げられる機会が増えていき、少しずつブランドが浸透していった。

また、産地表示タグ、専用パーチおよび専用発泡シールを作成して魚体等へ添付したことにより、さらに知名度が上がり、金沢市場や関東方面に加え道内からの引き合いも増加した。

日本海さけ・ます増殖事業協会から配付を受けたサケ及びヒラメの種苗を港内で約2週間かけて0.6gから1.5gに育成した後に放流した。

種苗放流実績

（単位：千尾）

| 魚種  | 1年目   | 2年目   | 3年目   | 4年目   | 5年目   |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|
| サケ  | 1,000 | 1,500 | 2,000 | 2,000 | 2,000 |
| ヒラメ | 41    | 24.6  | 24.6  | 24.6  | 30.8  |

ユビキタス魚探を活用して、陸上からクロマグロの入網確認を行い、「放流手順マニュアル」に基づき、速やかな逃避作業を行い、分離落網との同時使用により、小型クロマグロの放流を行った。

表層金庫に小型の漏斗を取付けて入口を狭窄し、分離落網として使用することによりクロマグロの混獲回避を図った。

## 2. 実証項目

### 【流通・販売に関する事項】

#### H ブリ流通の取組

##### ① イナダ(小型ブリ)の魚価対策

- ・ 大量に漁獲された場合、漁協鮮魚取扱部門がセリ・入札に参加し、生鮮出荷用と漁協自営加工場の原料用に買付けし、単価の底支えを行う。  
〈小型ブリ(=7kg未満)の買付目標〉  
生鮮流通用:100トン  
加工原料用:30トン

##### ② 差別化商品の製造

- ・ 漁協自営加工場にて②の取組の内、一部を窒素凍結装置を使用し、急速冷凍商品を製造する。  
[冷凍フィレー、ブロック等]

##### ③ 新商品の製造

- ・ 漁協自営加工場にて②の取組の内、一部を新商品の製造に利用する。  
[フレーク、フライ、塩蔵品、切身等]

##### ④ 漁協直売所と連携した付加価値の向上

- ・ 漁協自営加工場に併設された直売所で、上記の②差別化商品や③新商品を陳列販売し、周年販売を目指す。

##### ⑤ 「積丹美国ブリ」(仮称)のブランド化

- ・ 船上活〆されたブリの中から、7kg以上のものに限り、フィッシュアナライザーを用いて、一定基準の脂肪率以上の個体をブランド化する。また、「積丹美国ブリ」(仮称)の産地表示シールを魚箱に添付する。さらに、作業時間を早めて札幌市場への当日出荷を試みる。  
[取扱いマニュアルを整備]

### 【地域活性化に関する事項】

#### I 情報発信と魚食普及活動の推進

- ・ 地元漁協のイベントである「漁協祭」等において、漁獲された水産物の販売や試食により、付加価値の向上と新商品の情報発信を行う。
- ・ 地元の民宿や飲食店のニーズの把握に努めるとともに、関係者との交流を深めて加工品を含めた定置網物の地元消費の拡大を進める。

## 3. 実証結果

5年間を通して、イナダの水揚量が非常に少なかったことから、底支え買付量は計画を大きく下回った。

今後、イナダの回遊が増加した場合には、活〆やリバーサー(胃洗浄機)などを活用して魚の鮮度保持に傾注し、高鮮度で魅惑的なうまみに特化したブランド魚に育て上げ単価の向上を図る。

数量としては少なかったが、漁協自営加工場にて、フィレーやロイン加工し、真空パックして、窒素凍結装置で急速冷凍した商品を製造し、生活クラブ北海道へ販売した。

5年間を通してイナダの水揚量が少なく安定しなかったことから実施に至らなかった。

漁協直売所でのイナダの差別化商品(刺身)及び新商品(切身)の販売には至らなかったが、冷凍フィレーや冷凍ロインを生活クラブ北海道へ販売した。

〈前掲取組記号Fのとおり〉

実証事業中においては、コロナ禍の影響により「漁協祭」等が未開催となり、情報発信と魚食普及活動の推進を図ることができなかった。

なお、最終5年目に積丹地域活性化協議会が主催した「荷揚げ見学ツアー」において、地元料理人による「鰯宝」の試食会を実施し、一般消費者への情報発信と魚食普及活動を推進した。

今後、多様な機会を活用して、産地の知名度向上と定置網物の販売促進を図る。

コロナ禍の影響により、地元の民宿や飲食店が営業自粛を余儀なくされ、定置物の地元での消費拡大には繋がらなかった、しかし、今後は「鰯宝」ブランドの浸透力を背景に、消費拡大を推進していく。

#### 4. 収入、経費、償却前利益及びその計画との差異・その理由

##### 【収入】

5年間の平均水揚げ実績は、計画433.7トンに対し実績727.5トン(対計画比1.68)、金額では計画121,823千円に対し実績320,105千円(同2.63)と、量・金額ともに計画を大幅に上回った。

これは、1年目と3年目にブリの豊漁に恵まれ、3億円台の水揚げ高を記録したこと、2年目と4年目は若干落ち込んだものの、5年目には5億円台に達するなど、5年間を通じてブリの好漁が続いたことによるものである。

##### 【収入】

(単位:トン、千円)

|       |     | 1年目     | 2年目     | 3年目     | 4年目     | 5年目     | 平均      |
|-------|-----|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 水 揚 量 | 計 画 | 433.7   | 433.7   | 433.7   | 433.7   | 433.7   | 433.7   |
|       | 実 績 | 836.1   | 731.5   | 691.3   | 493.4   | 885.4   | 727.5   |
|       | 比 較 | 1.93    | 1.69    | 1.59    | 1.14    | 2.04    | 1.68    |
| 水 揚 高 | 計 画 | 121,823 | 121,823 | 121,823 | 121,823 | 121,823 | 121,823 |
|       | 実 績 | 374,594 | 177,296 | 324,666 | 211,616 | 512,351 | 320,105 |
|       | 比 較 | 3.07    | 1.46    | 2.67    | 1.74    | 4.21    | 2.63    |

##### 【経費】

経費総額は、各年とも計画を上回り、平均で計画183,462千円に対し、実績292,600千円(1.59)という結果となった。

経費増の主な要因は、年間を通してブリの豊漁が続いたことに伴い、氷代、魚箱代、販売経費(販売手数料)、漁具費、修繕費等の変動費が高んだことに加え、各年の好成績に伴う乗組員への賞与支給などにより人件費も増加したためである。

なお、各年の減価償却費を除いた経費合計は、平均で計画95,462千円に対し、実績204,600千円(2.14)となっている。

##### 【経費】

(単位:千円)

|     |     | 1年目     | 2年目     | 3年目     | 4年目     | 5年目     | 平均      |
|-----|-----|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 経 費 | 計 画 | 335,782 | 195,884 | 149,173 | 118,373 | 118,099 | 183,462 |
|     | 実 績 | 466,078 | 257,667 | 232,608 | 214,032 | 292,615 | 292,600 |
|     | 比 較 | 1.39    | 1.32    | 1.56    | 1.81    | 2.48    | 1.59    |

##### 【経費(減価償却費を除く)】

(単位:千円)

|     |     | 1年目     | 2年目     | 3年目     | 4年目     | 5年目     | 平均      |
|-----|-----|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 経 費 | 計 画 | 95,702  | 94,577  | 93,760  | 96,773  | 96,499  | 95,462  |
|     | 実 績 | 225,998 | 156,360 | 177,195 | 192,432 | 271,015 | 204,600 |
|     | 比 較 | 2.36    | 1.65    | 1.89    | 1.99    | 2.81    | 2.14    |

##### 【償却前利益】

償却前利益は、計画26,361千円に対し5年平均の実績は115,505千円(同4.38)となった。

2年目と4年目は計画に届かなかったものの、5年間を通じて償却前利益を確保することができた。

##### 【償却前利益】

(単位:千円)

|           |     | 1年目     | 2年目    | 3年目     | 4年目    | 5年目     | 平均      |
|-----------|-----|---------|--------|---------|--------|---------|---------|
| 償 却 前 利 益 | 計 画 | 26,121  | 27,246 | 28,063  | 25,050 | 25,324  | 26,361  |
|           | 実 績 | 148,596 | 20,936 | 147,471 | 19,184 | 241,336 | 115,505 |
|           | 比 較 | 5.69    | 0.77   | 5.25    | 0.77   | 9.53    | 4.38    |

## 5. 次世代船建造の見通し

|                                       |                      |                |
|---------------------------------------|----------------------|----------------|
| 計画:償却前利益<br>26.3百万円 ×<br>(改革5年間の平均値)  | 次世代船建造までの年数<br>25年 > | 船価等※<br>560百万円 |
| ↓                                     |                      |                |
| 実績:償却前利益<br>115.5百万円 ×<br>(改革5年間の平均値) | 次世代船建造までの年数<br>25年 > | 船価等※<br>560百万円 |

※ 現時点(5年終了時)での償却前利益は、計画26.3百万円を上回る115.5百万円 となり、当初計画通り25年間での次世代船建造について達成が見通せる状況となっている。

※ 船価等は漁船更新までの耐用年数を25年、漁網更新までの耐用年数を20年として算出。

【船舶】260百万円(=本船 200百万円+作業船A 30百万円+作業船B 30百万円)

【漁具】300百万円(=定置網一式 240百万円÷20年×25年)

<定置網一式>(側張、垣網、登り運動場、箱網、底建網)

## 6. 特記事項

改革計画の実践に伴い、5年間を通じ計画を遥かに超える償却前利益を達成することができ、まさに大願成就を果たしたが、これも偏にブリの豊漁が大きく寄与していることを明確に認識している。

本事業の取組みにより、ブリのブランド魚「鰯宝(しほう)」の創出につながった。現在では、魚体重10kg以上、かつ、脂肪率15%以上並びに外見が美麗で目の色が濃い個体に基準を引き上げ厳選したことで、品質とプレミアム感の向上に努めたことから、金沢をはじめ豊洲市場など全国各地に加え近年では札幌市場からの引き合いも多くなっている。

当改革計画時においては、北海道内におけるブリの認知度が異様に低かったことを覚えている。しかし、地道な努力を積み重ねた結果、道内消費の増加に貢献できたという自負もある。

また、多様な取り組みのなかには来遊が少なく計画が未達のもの、コロナの影響により人と接する計画のほとんどが沙汰止みとなったことは至極残念である。これら未達のものについては、計画終了後も達成しなければならぬ課題だと承知している。

地球温暖化に限らず、想定外の海況変化にも冷静に対応するため、過去の成功に囚われず、常に挑戦者としての意識を堅持していきたい。

最後に、もうかる漁業の実証事業を遂行したいま、日々、充実した気持ちでたのしむ漁業を実感しており、この機会を与えてくれたことに深く感謝したい。今後も生産者として、ここを込めておいしい魚をできるだけ多くの人に届けていきたいと強く思っている。

事業実施者:東しゃこたん漁業協同組合(TEL:0135-42-2511)

(第136回中央協議会で確認された。)